

玉置神社（看板）

玉置山（1,076m）の山頂に鎮座するこの非常に古い神社は、日本最古の霊場のひとつです。

創建は紀元前 37 年と伝えられており、崇神天皇の時代に、天皇の城を火事と悪霊から守るために建てられたとされます。玉置神社は、昔から、神道と仏教、そして古代の自然崇拝の要素を取り入れた修行の伝統である修験道の行者に崇拝されてきた場所です。平安時代（794-1185）、玉置山はこの習合的な信仰の修行の拠点として栄え、後に「大峯奥駈道」となった修行の道の重要な中継地でした。

明治時代（1868-1912）に政府が神仏分離令を敷いた際、神社の境内に建てられていた仏教建築の多くが破壊されましたが、玉置神社ではその寺院の一部が転用・維持されました。現在、この霊場（神社だけでなく周辺の山や森を含む）には、お祓いや癒しを求めて全国から参拝者が訪れます。2004 年、玉置神社は「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界遺産に登録されました。

注：現在、神社では一部の建物や文化財の長期間にわたる修復が行われています。一部立ち入りできない箇所があります。

[注：以下は、併設の地図上の位置を示す数字または記号に併せて使用するテキストです]

主な建造物と特徴

本社： 築 200 年のケヤキ造りの建物です。玉置神社の主祭神である、国常立尊（天地が創造された際に最初に出現した神）、伊弉諾尊、伊弉冉尊、そして太陽の女神である天照大神（あまてらすおおみかみ）が祀られています。

三柱神社： この摂社に祀られている三神は、無病息災や海上安全の神として崇拝されています。

玉石社： 本社と玉置山山頂の中間に位置するこの末社は、日本古来の自然崇拝の伝統を反映し、社殿を持ちません。杉に囲まれた敷地に、一部が埋まった黒い岩が敷き詰められた白い小石に囲まれています。パワースポットとして崇拝されているこの場所は、玉置神社の起源と考えられています。

社務所兼台所： この建物は、1804 年に仏教寺院の本堂兼台所として境内に建てられたものです。内部の襖には、江戸時代後期に描かれた見事な動植物の絵画があしらわれています。社務所は国の重要文化財に指定されています。

御神輿殿： 神輿（portable shrine）は、10 月 24 日の例大祭に境内を練り歩く時以外は、ここにおさめられています。

杉の巨樹群： 境内には、長い間伐採が禁じられていたおかげで、非常に古い杉の木が多数あります。その中には、樹齢 3,000 年の神代杉、高さ 50m・幹周 11m の大杉、2 本の巨木の幹が結合している夫婦杉（meoto とは「婚姻を結んだ [wedded]」という意味）などがあります。